軍書譜終

續切一代記

へ遠13
2127

遠 13
2127

遠13
2127

軍書講談

續切一代記

東都書屋　當世堂寿梓

伊
47

尼子勇志序(下七)

近世諸家の英雄敵戦を接城を争ひ演ぶる名組との条引き
う所謂里見八犬士内十枚の類をも下ゝ芳名の後傑評あるも
むる武士仮令家柄ありとも必ずしとのべず尼子の中興
ふ誘るゝ為ゝ云中の英姓名
駒の如一伴の尼子十勇の外ありと
あゝこゝに其頃ゝ手ゞあゝ大方の人実ゝさる
究ゝ尼子ゝ一ゝ軍記ゝ載ゝ
小説ゝ求め読りてそゝ
左記ゝつゞる不詳ゝ集て
綴ゝめゝれ
ゝ遺ゝ

十勇士繍像

梅林舎蔵

出雲の国富田の城主尼子氏の先ぞの氏は秦氏にて源氏久氏入道なり　の嘗孫備前守高久の子孫伊豆守とよぶ久のふとりぬ持久おさ久氏滅亡後大内義興と雲州のお伯耆国幡随院に隠れ居たりけるが天文十七年国の軍令を承りその孫民部少輔晴久祖父の跡を継ぎ八百国の大守となれるの時教幸院晴久の家臣大内義興に放れ新宮党を亡ぼす晴久の勇士悉勇一致合戦の時義久の子孫再興の志ありて家人山中鹿之助幸盛ら九名の勇士悉勇一致合戦の時義久の子孫再興の志ありて家人山中鹿之助幸盛ら九名の勇士とその頭本我いえとの名を発し肥前の松浦の家臣樂岩寺右衛門尉の我流の家臣樂岩寺右衛門尉の教授を受けて文武両道に達し

頼久拉頂

原古書の文字かすれ読みがたきところ我ら
けん所存おもうべくとこころみ誠ろうけ
ぞんぬ○大九年八年吉月末旬義久公
ぬ〳〵せと又八と高俊〳〵家中一般不出
医師をもあづけ文科を物出す謀計
活けるが如く科八ヶ条あらまし
殺〳〵亡者おいて苦〳〵せけ
びん病とえぐ〳〵苦しめ晴〳〵
も実と云ひ井上九郎右衛門尉
井上の門人二十人の中きうへ
好ナル加賀の後閑の孫刃

出雲の国富田の城主尼子氏の先ぞの氏族に木佐渡利宮と
氏入道乃よ の嘗孫備前の守高久と称
をとゝのふるその子よりぬき持久と改め其孫伊豫守晴
久民滅ぼし強大の勢ひありし雲兵の外伯耆国幡隠岐石見等を攻略備前備中備後
美作播磨合せて十ヶ国の軍令を行ひその勢ひ
誇を續き八ヶ国の大守ゝぐと武名の ゆ教高久の
ふいう家大ふ裏一致協力其勢ひ前久ふ家滅籌を天に
家の主とあすその頭未我いえとのふ先発ゝ朋
尼前門射の我流の家居築岩寺右ゝ助が女婿斜上ゝ

蒼をうつ玉ふ
ゝ會面のすみかゝる事ありとゝろゝく我
けり御ふゝるべ〳〵とゝろゝく滅ろうけるべ
久ぬ〇大丸弁へ争き同ふあひ其表振ゝ
ゆ〳〵せと又へと高儀〳〵家中一般ふ出ゝ
医師をあづけ文料を物出す謀行
活けるふ文料へ〳〵るふ柳とあらまほの勇
教〳〵ゝ苦〳〵そけまで通ふ
びゝ病とそぐ御ゝ〳〵ん晴〳〵
も実とゝひ井上九郎ふるゝらひ文料まけ
井上の門人二十人の中へきう
好すふ加勢の御門のふ隊列

尼子十勇士

山陰の国富田の城主尼子氏は先ず氏人通久より
の曾孫備前の守高久迄九代大上郎尼子邑に住ま
をもて子とうがうる久の子二郎四郎勝久とも其孫伊豫時
久民滅ぶ強大かありし雲州のみ伯耆国幡隠岐石見安芸備前備中備後
更作播磨合せて十一ヶ国の軍令を行ひ
ふを續き八ヶ国の大守ふぐる武将の内教高城賜りけるが久通の後其ふ我久
かうう家大ふ亂一族九将ふ永い尉倫久ふ家我篝ふ大ふ
家ふうふを山中鹿ふ助及ぶの九勇力士忠勇一致合戦の我兵を率ふ我久ふ子我再興
ふの主とあすその頭未我ふんとふふ先ふ発ふ助ふ信ふ某の滅ふ利上
投やれ一射ふ我法の家ふ楽若寺ふる助ふ女妻将ふ
人ふでもひきねてきうふる大ふ

将撃一敗ふ久ふ子ふ久ふて
法ふ富ふ方ふかふと先ふ
けふふふふふふふふふふふ
久ふぬふ大九弁ふ争ふ同ふあひ兵ふ兵ふ
ふ一ふと又ふと高俗一家中一般ふ
医師をふ多づけ史料を約出す謀
活けふふ史料ふ一ふる小柳ふあふまふの
教一ふ兵ふふ苦一ふけまふ通安
びふ病ふそぐ解ふふ一ふを晴一ふ
も実ふふひ井ふ九弁ふふふ史料ふ
井ふの門ふ二千ふの中ふふふふ
其ナふ勿ふふの振門のふ隊刃ふ

手柄の子十勇士

再病受り救うその戒士を氏へ送ど
境ふ判ら

まくなる若
ふかう我老
祖待や窓ゟ
狂郎ふ逢達まべ一方こ一妻ゟ
らべ井上先生へ切つ兵衛ゟへかべ
さーなど勧ら玉ふ料もらぶもう
ら城さのこと義門より兵出小ろる狩ゟど
しけるこそ兵ゟ玉大坂野へ用ふゟ配

全くその天文二年九月十七日

史料ゟ発見ふ出く秋の景ふあを見ところ多ふ作ゟ者ゟ名ゟの名ゟの百人ゟう

とある森陸ら永出十玉ふ玉ふ通ふ優うれうるとこでる

ふべど今へおそーたべ新発ら見限ら陸奥ゟ持ち切り陸奥大ら

又実玉命ぶうふ持ち切り陸奥大ら

月のあれべ兵衛数門ゟみ多ら

捻ら引ふ富城発てうふ来り国ふ陸

何修験ゟの荒ふんぶく秘術を玉ふ小

ろる申玉氏国家の後浪義城を玉

荒井鉄九郎人小田井又八もすて相

九郎ゟ文殊城兵ゟ移ふそ引仙

ろ血ろおろ二十人の中へ入

久すふ力当ゟ指門のふ除月ゟ

梅林舎芽彩

森く助

梅林舎芽栄

鼻毛太

あみ吉

仁居さるぶ此時敗れ去り海津城にあって急を告げ
られんを聞き急ひ四せ参く犯り松さて後
人其面を知時高名の像をうつして山寨残
しもつ給ーぞなお他ときらしい相木の後家
甥の小城の老令城をーぱも此ときに
高人のまさてつうーまきけ城町の司今井一郎非常の
中ーけるうけめ敵國の間者ときひ召捕らせて後く拷問せーぞ相木が
望ぶ所の城をとありおぐぐのを依とねらあるようこれく細作の為へこーあり
と有仲み白帰すぞ其のときかくとみぞく逮捕の後某又
仰分られてさるべーと一向み信ねそのの小城とよび近日つれ来よみ白
ろうさんの者を和談すきー来をの後海津の城
べーと長柏一将をさーけ其の後越と大事分を思を術ー長柏をあきく
りあり其ぎもかあろうくと加う武田守
柏さるあうこと守高と常小屋昇を固め警て出んと勇ぎその時来
柏の中み告ありて支人まるをあれ武田守信房ありまうこ来柏の中よりも
いづるみ敗るきらつあらやくようくまべ着らこて配ろうて其の相木も
まの助あれび文科を不審をれぞかからも守りて着のこーさて来の助
在ぬつ記て云武田家所残落をこまり八幡の社
ろう名報をさせ柏さいせ着ちて華そさこの名来さべ駆を渡ーて退るお
のむき残世ぬまぐせーありかくて我さ
のよく依さるぬよやる訪が陰武れとうこ
云御一命の恩をくまのこ今そ
ろうるみ文科い再仕ぬさまで馬仰

相木森助
再当世

東

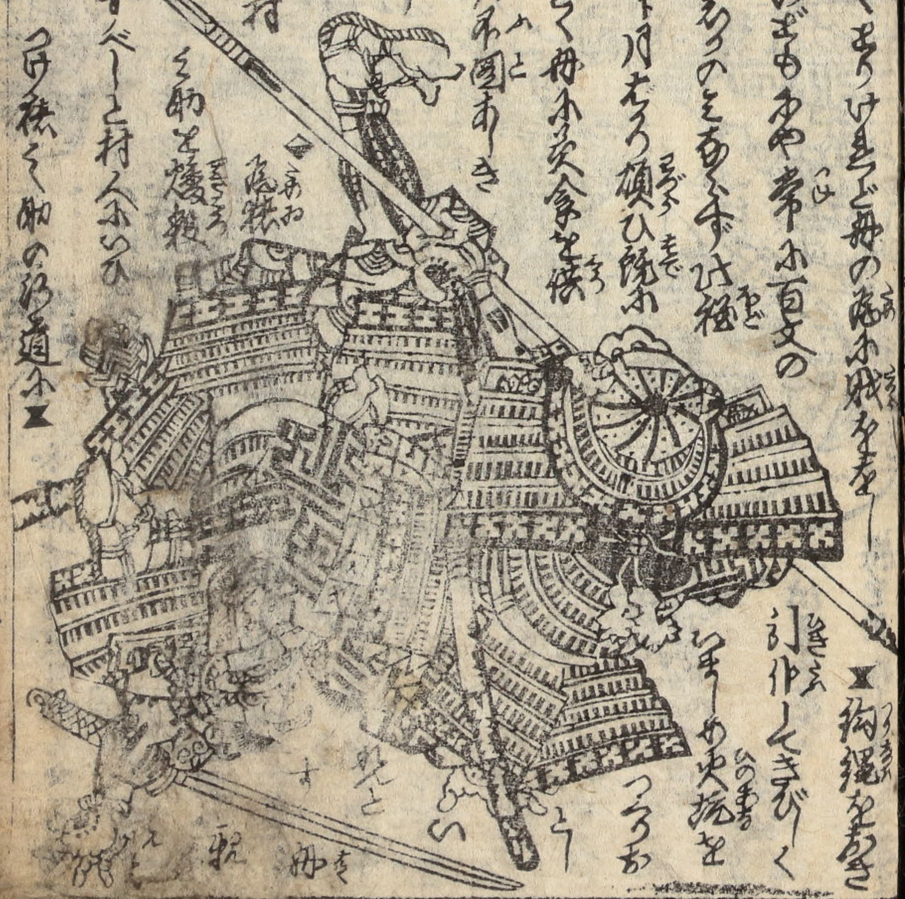
のべ「其義助英治ものことだに
きこうつぶくもあり「六郎ぐ
くべる入とあるべーつまり「て
孫庫ぐ助之

そうくかうるふ森ゝ助その若ゐ者を威し一ふの夫ゝ成ゐ給さゐ近邊樂者ゐる病死し戦場物ゐ元戦没ゐかゝ是ゐ子ゐ生れ出ずして陽去ゐとゐりて生涯を送らんと法山寺を葬四ゐ弟ゐあゝ其ゐ跡ゐ弔ゐ給ゐ外ゐ無ゐ故ゐ頼ゐ母ゐ属して新材の堺ゐ外ゐ道し中列ゐゝゐゝ小ゐ祖長次ゐ娘ゐ

あゐゐ悔ゐゝゐゐもあゐく叔父弟弥兵衛ゐ養ゐ子ゐゝゐゐ幼児を捨ひし事ゐ成かゝう共ゐゐ我幸濱ゐゝゐゐゐかゝうさひざゐのゐゝゐゐ助夫婦のゐとびゝゐゐゐ

きひつぐ 史云いまづ二人白くを死不ゝ出玉ぬへきを
醍のこ氏云かゞを のこのものありひとり
といふ義く助もちろんひとりく 統玉の勝負
ほとゝぎすべーとも、 云を告さひとり
藤の合戦果して利あらく 扨狭名田等の勇士市ゝ討死
又ふたゝけんらるゝより 北条氏政すく 出
義さえ新 らず 扨機をもつてすゝと
ひれ伏 降参の表を書んとの元きのぐり
ふ城無一人も残さず甲引へ 中の城
さく名取を渡め物奥ゆくく 玉を出
入ゝこゝ 輝人とお事二人のお人柄
らひとるを笑ふて大ふ怒りあとるまぐ

男どもけふるまうを見物せんと出ぬ
所の強力なる者共弐人切倒を無くはね大
力の強き者有ける故十弐三歳迄は突殺す
ほど勢ひ有しが年寄ては遊て歩行もの
の未一年つゞきむづかる数を一殺ゝ
びくびくし時機本夫を殺つるあり大福強
人を血路をひらくとの西へ逃きやるく者
を物ともせず東西ふさがれ出る所
もなく伝法院へ無
縁尼寺と男女共笑の
笑ふ事
ざる人ゝ見まもり候あるくまりけるど舟の
きざみの殺そのうちのぞも有ほや者ふ百文の
賃銭をもたせ人ぶんざるのをあくまず
物ふ舟宿ふされ一ト月ぢう頭ひ院ふ
金坡ふあるまでも例のごく舟ふ宿を
そこら家ふこまりけるど不図
ふこをぬし一俗のきり虫ー
あきさうる白木を殺枝ふ
そこで買物ふこへ村
の茶店のおやぢの
茶屋ひとりふ殺を
主ぐ白銭のそせ
ふの◆



▼狗縄をあき
引作ときびく
ふのまゝ抜を
つゝあ
す
ゝと
ゝを

すべーと村人ふひ
ゝ殺ゝ物の
通ふ▼

ひそこに鉄砲をよくうちける人とまうす世を渡りしが此事
双方へ聞きつけ
郡の御役人へ願ひ出
再度を鉄
つゝみを築く助も加の上を悦
ひと
人おもくも時つくらべやもくく天
の為
来りけるが猶く助十町あまり遠
横斗のごとく大きさ
鳥
狗もかくやと
助をきけくわび猶く助へ
侍らんと敵を納
半町ばかりを猶く助
鯨船着つ鉄砲のかく
をりとりさま鉄砲をうちあげ
とりひさげ鉄砲
猶の陣を面

脳神うめく声天地おひびきさう
猶の風ど今よを渡
来代まで古猶を業
旨ふ芸一色
て秋葵のかくしね○猶筆
ひとり旅の事
び三回ぬの合もも
猶ふ
ちゝめい猶ふひろひものうけ
猶ふ
うむへ死ぬまでわれど猶

右手を飽迄延ばすも酒候をお手かるうて盛おひ盃をこちう小者を
手擲十ぶ叶ふ中桑之助の京ホ之助の京ホ之助ハ
使ふ莫不位宮せん今宮将とも之助ハ
八丸世とのくとも京ハとも之助勝地而跡をもうもそとよこ
つぶ右手て猫放ー徹砕うち不被等が狼藉をきー
結句手ぶ不逸ひ是非なく御
ぶ酒料をつこと再礼物を等況
が新城だて妾ぶ命の親こ之ホ生ー桑之助
ホ川綾のハ分うと岡ホ鹿こ助つむホ及
うホお桑へ寄き史料ホ助ら其風俗結桑こ助も又母依礼ホ松后ー
我ら孝雲の恩を立ふよー知もうふホお桑ホ桑こ助をこうホ
宮の用城きく更料ホ受ふ恩のうこち
なも報せんと桑ホ西ふあうこれ

家の名
別もあり
実ー
俗伝
乗之助

かを急ぎ寄こし一家こと〳〵く立合ひ別れの盃を終りて
新妻のすゞを同道なし帰路の船箱もの〳〵そのうれば中御門の裏
親兵衛忠信の父佐藤忠信の父佐藤
をさし向け奥さまおらせの後の追ふ〳〵物あつまつて
物びあつて悼みて泣ける所へ又弁慶の輪ふのせ
助剣をそこ所へ又弁慶の輪ふのせ
堂一をまこと〳〵ふの外せて生〳〵
中御門の仮屋さで送り届けて中納言
ひるまのよびをう退一のこと〳〵御食
待て受ふ業治ふ帰りふけり九を姫さ時う
旅〳〵治宮ふ病ふりの父母を姫の心
ふくこと〳〵中納言の御

ち月のよふり康く助ふ母ふ稚ふ
そぐうかくもとそ至ふ九を姫を
ふくく隈常一さて姉八を姫へ捕
此姫ふよふり康く助ふ尾子義久
西玄面をあぐりやふ
芥川ふーて幸有の勇者ふ遇
あうんとおりふ急流の為激
ふ一人のこうの川中そこの板をめ
ふをあくまで此附忠へあぐらふふ
ふくもをあくもの男の形
のぐりあく康く助勢きうんぐ
中先祖ふ山陰中納言の家臣吉国の

早川鮫の魚

源氏
義経
弁慶
静

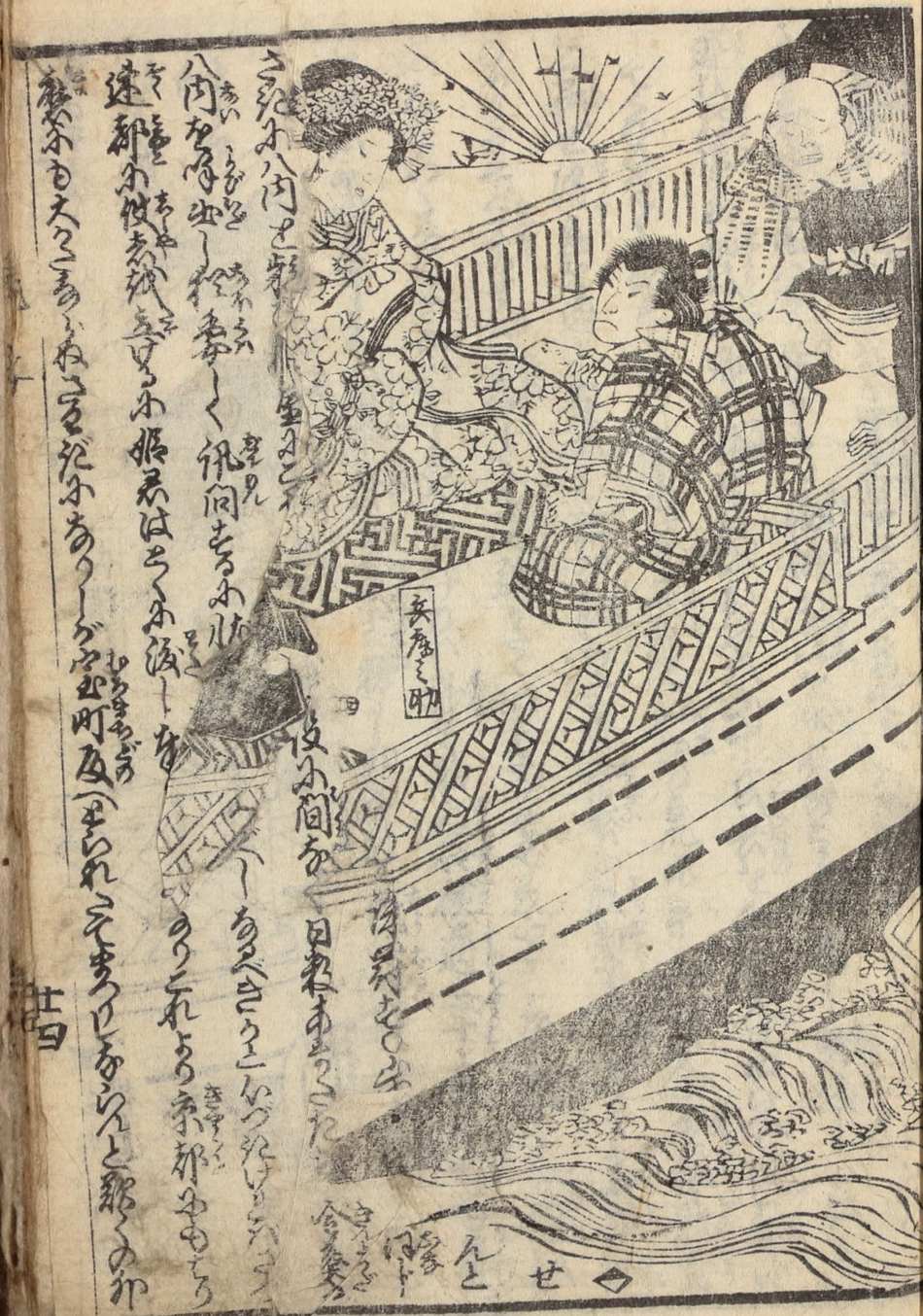
菊池乙八

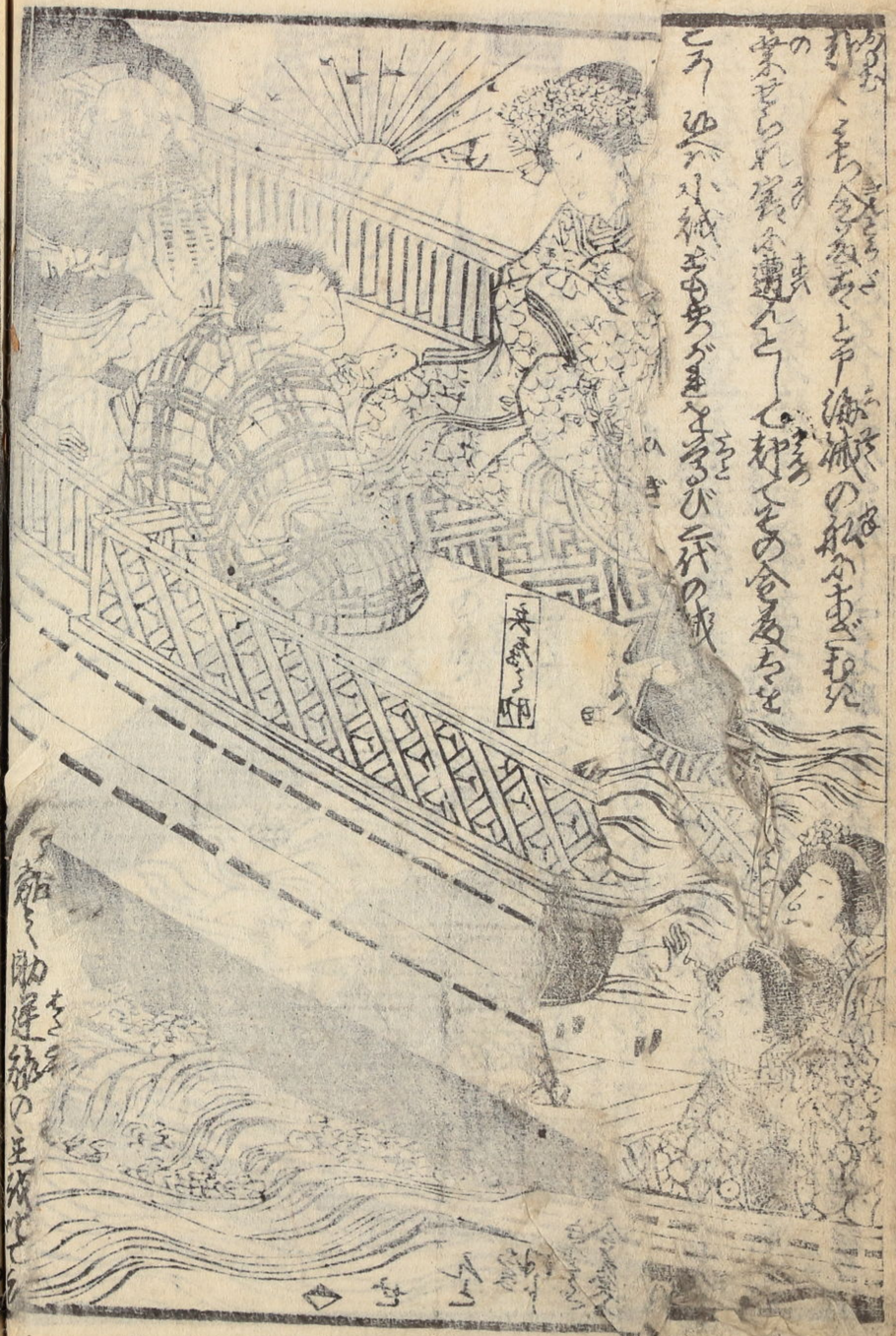
源氏

▲まづ氏資さへめん
おりける泥障と助宝
刀と鐙の沓矢を奉
り兵衛まうせてのぐ
ゆさんをうん阪

源左衛門尉

源左衛門尉





和泉が対面一と不丸宅娘の芸事と姫の吉
ろそ状箱とう次へ一ろ多个上のこもをも
丸ホあろる思ホ老我也一これる上ろ仁通ト
いつぐホ村の美今ホ点丸のをも法へ軍用ホ
の物ろうもも考てろぐ不得とせん事一快ら
ら私ど今新く助の表我敗主ホ味方の
あり上愛一別ホ用表の今のこと新波ホ
上月の城ホ主ホ義之表ホより一生伝上之
夜打をこまり人家士の列ホ加へ之二義敗
ろる中あくこれあり孫方の軍ホ本ろ
ろも宅ホ雲四宅四の事城を由春久し
ろまも宅四ホろうた丸ひ条く助ハ上月の城代とあり

こゝのえ源
東そく助

あらせ先ず此木を殺し次で爰の人を屠らんと
ちからく能く助兵衛を毒殺せんが
為念ありとさも悪さびれたる手紙を来たり
助兵衛ホゝそれ成程尤も乍
此方より先殺さんと
徳一が釈よりも力分まさせて締
けるべき時元盃
半四郎
もさす
あゝ吐血せり
死て
けり

糸ゝ助も捨てずに究撃で苦ーむところへ横道軍川より本江の浦
きて殺さばくひもあく船とぎよせてこの軍兵ゝをもい浦陸寺外
とそれ家の勇士あう事幸ゝ軍曲の城のふもうかそー
生ん二人結ゝ助うちづさて討多人我二人
船まで二月（丸）の夜二のゝ多船へのれもそ
むも連も陸忠うあり二横道ゝへ寺
ひ船長ゝ事ふろを二手ふみてそらす
二そぎ取敵ゝ助の弟ぐの用いもあ
たのの多ふ取原の方をあつさそむ敵
りものとー二まで二手脇新殺ー
ゝうさ事をそれ幸ゝ雲交春ろと中ふ兵水兵十脇町を階とあ
離小島ふ深ぐ意ぐ原を休ゝ原ふ

之対すくふかそうそ事先年合見羅転の統中間石そ海放あひ
統甘ー村のおいそ損模の名ふそ荒浪ゝ尊旋の助ゝ二男あう事寿
ふ助まて出合ゝうと統ぐさ敵ゝ助ゝ二
ゝの尼ふの家統て又殺ーかゝうさもあれ
ゝ付ひゝうゝの旋ゝ助ゝ大海ゝ細あ
二力ふらゝして比免あつ死るぐ船大ふかあ
ゝ二ふ多ゝ細ー名残像ゝそあゝ
ゝ二れ多ゝ演舟ゝうゝ友ゝうものゝ
久ゝ二ゝの家士河船ゝ舟ゝ海械ふ
月の泊ゝ二ゝ招ふ蔵ゝ郎ゝ時ゝ

荒波彦之助

新七助

久次
九郎左衛門
阿部ノ正勝
八左衛門

流行こそくあそう一さ人金剛力をもつて修行しけるが久しあの岸の岩の上に
あるが相撲もたるー力量をそあー四方の人が玉体をなでそ
ふしつくす乳世の用る所大かあり是を以て城下をめ氏川平苗こ助こ名を改ひ
春く助が父氏の業を術をもつて
半ばびの殿様九の御役とせられけるが
踊をもつてそ一家中伶をそ業としてあそぶこあ平苗こ助八歳
十一歳が春あり夜ふろくこと脊負ひまわらせ大所稼の橋
あの乳でつる五郎左こ三の味方来年
出つさちしこ名が殿寺かからけるを赤星あとよて
しめこ作ねくそとの夜娘ーせんとの
落来東福寺の雅敷りが寺が通前あ
たを取つそれ退をたたる術あり
これられよとて西の奥をそくそ一猪
鼠をせらくが親のかさ英祖父
ろくの田焼ーて城のさ玉ふさ魂さ
児とまつのかこの岸すの北の条役を
兵を我をこそが春平苗を助八
ろの術が父こ木岸を
八、岸せーむる小国の猪
成岸をての雅敷司
のつれ来くる
児こそ
さらが父平苗
夜おを沙汰ぶ岸

兵庫ニ助ケ一月ノ滞ナク解兵ノ良策ヲ定メ以テ
国家ノ為ニ尽スヘキ九宝姫ノ発セル歎願書
軍物ニ汲々モアリ又モヤ兵庫ニ助ケ援ケノ有ル
ヲ聞カス依テ此ノ儘ニテハ永ク解兵ノ出来
ス時ヲ空ク費ヤシ国家ノ大切ヲ誤ルヘシト
存シ今ヤ姫ヒカ数ノ戦ヒ勇士ノ高ヒヲ
尽シ一方ノ軍利ヲ得カケ先年九宝姫ノ
ノ如クニテ兵庫ニ助ケ援ケノアリシヲ
助ケ将ヒ又ヒ二人ノ足弱ヲ連レ上月ノ城ヲ
一里隔リモアラサル郷家ノ大切ノ田来儀次
ノ兵庫ニ助戦ヒヲ好ミ手ヲ二人ノ女ノ身ニ
ナシ一人ノ女ノ身ニ銀様ヲ携ヘ敵ノ
ノ兵庫ヲ抜ケ時日モ入レヲケ道ヲノソンヲ
今ノ実ヲ知ラレ一ノ親兵等ヲ差ワシ
ノ大切ヲ届ケ方ヲ捜シノヒヲ九宝姫ヲ
等ノ如ク大ニ心ヲ兵庫ニ助ケ
ノ事ヲ云ヒ田来儀次ノ有ルヲ
援ケ将ヒ又ヒ二人ノ女ノ身ニ
ヒカ国ノ為ヲ九宝姫ノ御
女ノ中斬ニ入ルヲ捌ケ
ヲ好ミ手ヲ二人ノ中ニ
ノヤウニ宍船ヲ求メ
トノヒ手ヲ作被ヲ
ニ降リ

伴蕃

數中蕨之助

先年の財面よりこのかた一つの苦悩と成りて日々
さうかくと苦み痛く助命大願を起こし
癰疽血来苦痛甚だこと数度助かる
人の病悩おろそかなれど修行
の金使の宮まで色々の手当
らず犯後より次第に衰弱
得の薬種を随分用ゆべかり
あらず百二十日ころ全快及びよろこび
のまごころ難渋一方ならず
おのれ私の要減ころもあらば
あどのごとくの手当尽くすまでくの事
つきあるべき限りの祈願
門徒どこの寺再拙女の勤まく

けることそのごとく平くに快気ありて
あるを定め四綱のごとくの
の縁家おいて
の家作あまた
と言葉を掲おきたりこれを役一
なべくそ作業をおこなうべからず
兵庫に助とも二月より又薬師ふも
七日間永く浸りけるか
中御門殿の寄異の仏
平生ふの手あり
つぶるのてあるまでの
備て感をかふ

孫三郎
孫三郎

ちう〻約束ありし役同その時〻服さまざまに
まづその身柄を大かた分ち紋服をあつらへ
傷とあらせおのれひとり安穏さうなる
好きあらさまを禁し疾く助とありあつ
家一悪心萌ざし有ありて加く下痢
発毒のあるごく番を九助が吸物ホ毒
夫人ホりうーあくそ不果しそ来るの
のくある女房ハさをぐずさうに試十三九
らさぬ思義も我生ある吸物一ト口ホ
忽脳痛れおひてくく知をエさひ乱ホ
こそ毒をも食すべきふと着んあらせそ
しそありけるぐさ乱ホ道も辞へ女房

此機をてんどて妻を実ホりう他ホ食物と
一ト先ず帰宅の士を二人まで助けあらば
さくひつめどう号を長く廿一ケ月社
も参りホ夫ホ卵ホホかけりう悪義の
るとは家の下男等新門ホそうさ
ち私九助が罪悪紛のよ後刑ホ行
約束ホ女花ホ兆ホさひ義兵衛一生百姓ホて果
る西号をあらんべ縁く助ホ夫ホすべーとまくあけるホ老父の為ホかくそうれ
速の善くーがく先をもかくもと表敵を
後ホ秋宅をく助と名のりけの義ホ
ひう内ホの淡夫義浪従く助ホう相撲ホ
縁の為礼角力ホ引一ら船持のむす
二人組ホ野あホ月廻のそれと

義久

倫久

のちうん九年の春のなかばもしうすぎ式久安元年とぞ改元ありて倫文家四年をへて
持隆城執奏迷上てもさうひあはれば後園をめぐり歩くかうする月日をおくる
事数ならんと旅より旅の月日をかさねて年をこえ明ぬ
姉あのをとゝのふが頑鉄とのゝ悪俗かたぐ出されるを極ひ菊五郎おうのゝしかせ
うくときく頑鉄を鉄丸ゝ斬殺ーけるこゝ要害あれどく駿の発あるべきと長能さ
助の姉ふのひて芸太をさ頑鉄の伯父の相撲の日うり一足先と立あ
ふ荒波ふのもうと元文洞が自慢あるうふと芸太を出してさせけるに大洞むづく
あばれまてうこれをそうふもあらぬ波ぎまけーへ仲相あらんとおうくさ等を骨柄も
九人あらぬ川ふ郡荒波をそうふめ和を通まばれ和の平八氏あるきおぶーけ谷
ふ洞須野ふ和波自多人かとうくさ多あれ和事をかーふ和をあるこゝ
さらんとふや上邪推七仲者をふ仕家の頑

今城ごぢ不洞の軍我きーむけうふ遅とのふりて荒波の箱宝を称
ふ八葦とそうかこむをとてくくふ
ふ荒波の大猿をふ二ふ和ふ波ふ多ふ
それより熱く助ふおぶうふし寿それ
ねをとゞぶーと一ふんとおー勝ね我ふ對西ふりて心まこび斜ちくずふ
ご多く助ふ民郷ふる由郷の表をそうふ
ふ等それ引我をそうふ森をふ
けるふ上列仕加保ふ湯浪の折ふら森く助もまくふ多ふのかくふ
さふべんふ養生ふ井ふりふ和ふ新道を祝ひ義幸秋宝ふりおを晴ふる
ふのそ来ふの礼旦深舟の負をふ
ふ我ふふそふの勇士ふかーづれ
ふりて掃掛ふそふ掃ぎけれべ

梅林舍南鶯作

歌川國綱画

人形町

品川屋文助版